(公益財団法人 大倉精神文化研究所)『大 倉 山 論 集』 第 六 十 四 輯 抜 刷平成三十年(二〇一八)三月二十六日発行

御木本幸吉の二宮尊徳顕彰

飯森富士

夫

# 御木本幸吉の二宮尊徳顕彰

飯 森

富

夫

次

目

はじめに

一御木本幸吉の略歴

二 御木本幸吉と報徳運動

(一) 二宮尊徳との「出会い」

(二) 中央報徳会との関わり 御木本幸吉の尊徳生誕地整備

御木本幸吉以後の尊徳生誕地・

四

おわりに

キーワード

栢山村

斯民 三重県斯民会

服部北溟

東海道線松田駅

143

#### はじめに

て有名である か。三重県英虞湾内で苦心の末、真円真珠の養殖に成功し、世界中に「ミキモト・パール」を知らしめた実業家とし 御木本幸吉(一八五八〜一九五四)といえば、多くの人が「真珠王」という呼称を思い浮かべるのではないだろう

の養殖に努力した御木本が、主に北関東で農村復興に努めた尊徳の遺跡の整備に携わった理由を近代の報徳運動の歴 あろう。その生家と敷地が今のように整備されるきっかけを作った人物こそ御木本幸吉なのである。志摩の海で真珠 ところで、神奈川県小田原市栢山に二宮尊徳(一七八七~一八五六)の生家が現存していることを知る人も多いで

#### 御木本幸吉の略歴

史とからめて追ってみたい。

組合理事に就任。一八九〇年(明治二三)三二歳、東京上野の第三回内国勧業博覧会において帝大教授で動物学者の める。一八七八年(明治一一)二〇歳で家督相続、幸吉と改名。 ん屋「阿波幸」の長男(六男三女)として誕生(幼名・吉松)。 まず、御木本幸吉の生涯を略述したい。安政五年(一八五八)一月二五日志摩国鳥羽町 特に真珠が高値で売れることを目の当たりにする。二三歳で三重県勧業委員に、二八歳で志摩国海産物改良 東京・横浜などを見学し、 一三歳の頃、 家業の手伝いのほかに青物の行商を始 (現三重県鳥羽市) 海産物が貿易 0 対象にな のうど

に成功する。 箕作佳吉を知り、その指導を受け、養殖真珠の実験に着手し、一八九三年(明治二六)七月一一日、半円真珠の養殖 (明治三二) 四一歳、東京銀座に出店し、真珠の専門販売を開始する。 一〇月、 英虞湾田徳島 (後に多徳島と改称)に御木本真珠養殖場を創設した 一九〇八年 (明治四一) 五〇歳、 (三五歳)。 真円真珠養 八 九 九年

九一三年(大正二)に大阪支店、一九二二年(大正一一)に帝国ホテルアーケードに直営店を開設し、

年

(昭和六)には大阪支店を閉鎖して神戸支店を開設した。

殖法の特許を取得した。

ヨーク、パリ、ボンベイ、 海外では、一九一三年(大正二)のロンドン卸売支店を皮切りに、一九三七年 ロサンゼルス、シカゴ、サンフランシスコなどに支店を開設している。 (昭和一二)までに、

う中にあって一九四三年 奢侈品等製造販売制限規則が施行された。このため、真珠の生産・営業は困難となり、さらに一九四一 ところが、一九三七年 一二月八日の太平洋戦争開戦により、 (昭和一二)に始まった日中戦争の長期化にともない、一九四○年(昭和一五) (昭和一八)、御木本は真珠の薬品化の特許を取得する (カルシウム製法、 海外支店を閉鎖、 国内での事業規模も縮小せざるを得なくなった。そうい 結核療養剤)が 七月七日 昭 和

その後、

鳥羽の工場は軍用となり、東京の本店や工場は米軍の空襲で焼失する。

設された。一九五四年 を通じて、ミキモト・パールが国外で知られていたためであった。一九四八年(昭和二三) 占領軍に接収されていた横浜のホテルニューグランドに売店が、 真珠養殖場見学の回数が増大し、アメリカの新聞・雑誌に記事が盛んに載るようになる。一九五一年 一九四六年(昭和二一)御木本は米軍中央購買所と真珠の指定納入契約を結ぶ。これは、 (昭和二九)九月二一日、胆石と老衰のため、 鳥羽の自宅で死去。九六歳であった。その功績 翌年には日本人向けに新宿伊勢丹に委託店が開 からは連合軍将兵の幸吉 戦前から海外支店 (昭和二

に対し、正四位勲一等瑞宝章を授けられた。

### 二 御木本幸吉と報徳運動

### (一) 二宮尊徳との「出会い」

れる。 県日光市)にて七○歳で没した。 県小田原市)に生まれる。一四歳で父、一六歳で母を亡くした金次郎は二人の弟と別れ、 領仕法雛形を作成。 分して、妻・長男とともに桜町へ赴任。金次郎による村の建て直しは北関東を中心に約六○○か村に及ぶといわれて 分家の宇津氏の所領桜町 一宮金次郎は天明の飢饉の最中の天明七年(一七八七)七月二三日、 藩家老服部十郎兵衛家に住み込み、やがて同家の財政再建を任される。金次郎の活躍を聞いた藩主大久保忠真は 二〇歳で生家跡に小屋を建て、 五六歳、 金次郎は幕府の役人に取り立てられ、武士としての名乗りを「尊徳」とした。 六七歳で仕法開始を命じられ、日光へ赴任。安政三年(一八五六)一〇月二〇日、今市 (現栃木県真岡市)の建て直しを金次郎に命令。三六歳、金次郎は栢山の家・田畑などを処 独立の準備をした金次郎は徐々に田畑を増やし、 小田原藩領相模国足柄上郡栢 小田原城下に出入りをする中 伯父万兵衛の家に引き取ら 五八~六〇歳 山村 (現神奈川 (現栃木 日光神

でいる。 尊徳没後、 門人をはじめ、 関係者・団体が尊徳の教えの継承・実践をさまざまに試みるが、これを報徳運動と呼ん

学の折、 御木本が尊徳のことを知るようになったきっかけについては諸説がある。まずは、一八七八年 日光へも立ち寄り、今市にて尊徳のことを聞いて感銘を受け、 以後、 尊徳の言動をまとめた『二宮翁夜話 (明治一一) 東京見

する説もある。いずれにしても、尊徳の業績や教えに感銘を受けた御木本は、自身を尊徳になぞらえようとしたとい とする説や、一八九九年(明治三二)に東京銀座に真珠店を出した後、たまたま書店で尊徳に関する書籍を買ったと などを読んで、自らを「伊勢の二宮金次郎」と称するようになったとする説がある。また、一八九二年(明治二五) 一二月、知人から入手した尊徳の伝記『報徳記』を読んで感銘し、自分も「海の金次郎」になってみせると決心した

うことのようである。

に読ませるため、一八八三年(明治一六) その浄書版を一八八〇年(明治一三)に旧相馬藩主相馬充胤が天皇へ献上。天皇の指示により、 務省版が刊行された。さらに一八九〇年(明治二三)一般向けに大日本農会版が刊行され、一九三三年(昭和八)に は岩波文庫版が刊行された。御木本が知人から入手したという『報徳記』は大日本農会版であろう。 ちなみに、『報徳記』は相馬中村藩士で尊徳の高弟、 宮内省版が、一八八五年(明治一八)には広く官吏に読ませるため、 娘婿でもある富田高慶が尊徳の亡くなった直後に書き始め、 全国の知事以上の者

にいろいろな形で刊行され続けている。一九三三年(昭和八)には岩波文庫版が刊行された。 福住家(萬翠楼福住)を継いだ、尊徳の高弟のひとり福住正兄の著作で、一八八四年(明治一七)以来、今日まで実 『二宮翁夜話』は片岡村(現神奈川県平塚市)の名主大沢家の出身で、箱根湯本(現神奈川県足柄下郡箱根町)

### 二)中央報徳会との関わり

七七〇〇万円の六・二倍に達した。内務省は財政難、 一九〇五年(明治三八)日露戦争が終わるが、ほぼ一年半の戦費一七億二〇〇〇万円は明治三七年度一般会計二億 強兵の育成など)を画策し、そのために報徳社・青年会・産業組合を利用することとした。そして、 寄生地主制の進展などに直面していた農村の建て直し (担税力 内務省

されたのである。 内に事務局を置く半官半民 同会は一九一二年(大正元)「中央報徳会」と改称される。 の 団 体「報徳会」 が一九〇五年一一月に設立され、 翌年 ・の四月には機関誌 『斯民』 が創る 刊

以下は『斯民』の記事に見える御木本と(中央)報徳会との関係である。

夫を軍隊的に訓練して、 営業して居る」「漁夫も能くその命令に服して働いて……中には一箇月に五円余の貯金をする様な、 真珠を沢山に作り出しても、之を日本人に売ったのでは、 ともあれ、 勤 同月一三日に戊申詔書が発布されたことと関連する行動であろう。戊申詔書は、皇室を中心として人々が一体となり、 勉 生業に励んでいる様子を御木本は語っているのだが、これは戊申詔書の趣旨とよく合致する話といえよう。 九〇八年 ・倹約・生業に励むことを国民に求めるもので、教育勅語とともに国民の拠るべき価値規準ともされた。 目下は、 伊勢神宮参拝を終えた平田・井上は三重県内を巡察し、御木本とも面会した。その際、 (明治四一) 一〇月下旬、 八百万個の貝を養って居る」「皇族や貴顕の人々が、 其時の用に具へて居る」などと語っている。真珠の生産をめぐり、 内務大臣平田東助と内務省神社局長井上友一が伊勢神宮を参拝した。これは 少しも国益にならぬ、因て主として海外に輸出する方針で 大勢見物に来られる事があるので、 人々が一体となって勤 御木本は「いくら 心掛の好い者が 大勢の車 それは

府佐 劈頭第一に水野内務省参事官の欧米自治談、 戊申 Щ 九〇九年 与三 郎 師範学校附属小学校の小林、 ·詔書奉読、 三重県四郷村伊藤小左衛門、 郎 (明治四二)一〇月三日、三重県斯民会が発足した。 尾呂志尋常高等小学校長永田定次郎、 篤行者表彰の後、 山田 報徳会評議員白仁武の祝辞、 二見町辻喜代蔵、 「両訓導の談話あり。 桑名郡城南村長後藤栄三郎氏の納税、 阿波尋常高等小学校長谷口忠次郎、 鳥羽町御木本幸吉諸氏の談話ありて」というように、 次に別室に於て、 内相平田 午前中の発会式では、「君が代」合唱、 の演説があった。 阿山郡鞆田 兵役、 村長高島多兵衛、 教育の三大義務に関する 身田尋常高等小学校長国 午後の茶話会では 名賀郡視 勅

決められたことを、井上が述べている。 豊受大神宮 中には井上友一もいた。実は、三重県斯民会発足の前日である一〇月二日に伊勢皇大神宮 の名士とともに御木本の「談話」もあった。ただし、御木本が何を語ったのかは明らかではない。発会式の参会者の (外宮)の式年遷宮が行なわれた。 平田・井上らの遷宮式参列の日程に合わせて三重県斯民会の日取りが (内宮) の、 一〇月五日に

思想の実践団体としての役割を担っていたのであった。 の教えでもある。規範の中の「至誠・勤労・分度・推譲」は報徳思想の四綱領とされている。 トナシ能ク分度ヲ守リ以テ推譲ヲ為」し、「協同一致ヲ以テ公私ノ事ニ当リ立徳致富ノ実ヲ挙ケ克ク相互ニ救済ヲ ヲ期スル」ことを目的とし、その会員は「忠君愛国義勇奉公ノ思想ヲ涵養」し、「至誠ヲ以テ本トナシ勤労ヲ以テ主 為」し、「納税其他公ノ義務ヲ重」んずることを規範とすべしとされた。目的の中の「道徳ト経済トノ調和」 斯民会は「教育勅語ノ御趣旨ヲ遵奉シテ精神訓育ヲ奨メ広ク道徳ト経済トノ調和及教育産業ノ発達地方自治 斯民会は、 まさに報徳 は尊徳

おり、 なかったことが窺える 民』に載っているが、そこに御木本の名は見られない。ただし、明治天皇の追悼特集号には御木本も追悼文を寄せて 九一〇年 その肩書は「三重県斯民会評議員」となっている。三重県斯民会における御木本の地位は決して軽いものでは (明治四三)~一九二二年(大正一一)三重県斯民会の第一回~一二回総会の記事が、その都度

## 三 御木本幸吉の尊徳生誕地整備

寛政一二年(一八〇〇)父が亡くなり、享和二年(一八〇二)には母も亡くなり、追い打ちをかけるように酒匂川

には柳新田 の生家は西栢山 の氾濫にも遭った、 からその生家は姿を消していたのである。 (現神奈川県小田原市)の渡辺儀太郎の所有に変り、再度移築された。金次郎兄弟の離散後、 (現神奈川県小田原市)の奥津平兵衛の所有となって、奥津家へ移築され、一八八九年(明治二二) 一六歳の二宮金次郎は二人の弟と別れ、 伯父の家に引き取られた(前述)。それに伴 金次郎

の経緯について『斯民』誌上に記した服部の文章を見てみよう。 そうした中にあって、 御木本幸吉は服部北溟なる人物の慫慂によって、 尊徳生誕地の整備に携わることとなる。そ

となり、且縁者の手に渡って居るから、報徳の根源地として、翁の高徳を千載に伝へんが為め、 道路を迂回する人が多い。其処で松田駅構内に、道標を一基建設したならば、 恢復したいとの希望と、又一つには、近来報徳の教へが盛んになって来たに付ては、遠近篤志家の、 つは鉄路旅行者に、 へ参拝する者が多く成って来た。所が小田原在の栢山を知って、東海線松田駅在の栢山を知る人が尠ない為めに、 本年の六月九日でした。或機会に、真珠業の御木本幸吉氏に会見したから、談余二宮翁の誕生地が、当今桑畑 此二つの希望を話した。 報徳の因縁を結ぶ動機ともなるであらうといふ考へから、是非永久的な道標を一基建てたい 一つは参拝者の便利ともなり、一 旧績として之を

に決した。次いで十一月十五日を以て、土地買入は固より土工一切を終へた。之れは実に桑田変じて我意と成 の為めに尽される精神は、 氏は即座に此偉人の為めに浄財を喜捨する事を諾せられた。予は希望を話したのみであるのに、 時間でいへば、五分間足らずの中に、相模聖人二宮尊徳翁の誕生地は愈々恢復する事 氏が平素公共

実は恢復一条を斯の如く誌上に発表するのは、 真面目なる御木本氏の意に副はない事は重々知って居る。

からうとの注意もあったから、 て喜んで貰いたいのと、 は人に知らしめんが為め此挙を敢てせられたのではないが、予は情の上から、一日も早く報徳会員諸氏に知らせ 主幹国府氏が、 其大略を報知するのである。 他の雑誌等へ告白するのと異なり、 併し恢復中には種々の事情が纏綿して居りました、 左まで御木本氏の徳を累はす事はな

夫れは夫れとして、

次号に於て詳細の事を報告しよう。

その理由は不明だが、事に依ると、御木本が続報の掲載を承知しなかったのかも知れない。 建立者御木本幸吉の名は碑面のどこにもない。なお、 たものであることを「二宮尊徳翁誕生地恢復成る」と題して『斯民』誌上に公表したのであった。 は御木本の意には沿わないであろうことは承知の上で、尊徳生誕地の回復、 九一㎝)、台石の厚さ一尺(約三〇㎝)。 て、 用はしなかったが、 が縁者の所有となっているので、 (当時の東海道線の国府津〜沼津間は現在の御殿場線のルートにほぼ相当する) 構内に道標を建てたいと希望を述べ すなわち、一九○九年 御木本は即座に費用の提供を承諾し、一一月一五日には土地の買入れはもとより、 面に「稚松」 次号において詳細に報告するとあるが、次号を含め、 が植えられた。 服部によれば、 (明治四二)六月九日、服部北溟は御木本と会見した際、 旧跡として回復したく、また、生誕地への参拝者が増えたので、 整備された土地は総計二五九坪で、全体に平均二尺五寸 松田駅構内の道標は御影石製で高さ八尺(約二m四二㎝)、台座の高さ三尺 碑の正面には「二宮尊徳翁誕生地栢山道 引用文の末尾に、 以後の 「斯民」 尊徳生誕地の整備中に起きた種々の事情につ 道標の建立は御木本が私財を投じて為し 誌上に関連する記事は見当たらない。 尊徳の生誕地が桑畑となり、 約一里半」と刻まれている。 工事の一切を終えた。 (約七六四) 土盛りをし 道標は現存するが 東海道線松田 右に引 地所

部北溟には①『二宮尊徳報徳講話』(杉本書房、 (良明堂、 一九一〇年 (明治四三) 九月一○日発行)、③『尊徳翁と報徳主義』(太陽閣、 一九〇九年 (明治四二) 六月一五日発行)、② 一九四一年 (昭和

当たりにしたため、 年に出版した著書とは①のことである。 地が回復したが、 敷地も人手に渡って畑になっていた情景を見て、御木本に遺跡の保存を願ったところ、御木本は即座に快諾し、 一〇月一五日発行) 自分が報徳に関する著書を出版したのも、それと同じ年であったと記されている。 ①の発行日(六月一五日)の直前(六月九日)御木本に会った折、 などの著作がある。 すなわち、 ③の自序には、 服部は①の出版に関連して尊徳の生誕地を訪ね、 約三〇年以前に栢山を訪れた際、 生誕地の回復などを頼んだと 尊徳の生家はなく、 その状況を目 生誕地回復と同 生誕

〇九年 京家庭学校長留岡幸助、 誕地に、 御木本による生誕地整備という出来事は波紋となって広がった。 なお、生誕地は一九一○年 (明治四二)一二月二三日発行の会誌に、御木本の「義挙」と服部の「斡旋」とによって保存が成った尊徳生 「旧蹟の由緒」と「恢復の来歴」を記した記念碑一基を建立するための募金広告を掲載した。募金広告は東 斯民主幹国府種徳、 (明治四三) 一月、御木本から報徳会へ寄贈されている。 新潟積善組合主事林静治、 当時、 報徳学訓導山田猪太郎の連名によるもので、 静岡県掛川所在の大日本報徳学友会は一九

いうことになろう。

その本文は左のとおりである。

ŋ きを得たり。 れし後三日を隔て、該地の買入れ並に土工の一切を了り、 今回三重県御木本幸吉氏の義挙と服部北溟氏の斡旋とに依り、 源六郎翁をして生前に必ず同志の力を以て此地を恢復せざるべからずと慨歎せしめたる所なりしに、 一宮尊徳先生の誕生地たる神奈川県足柄上郡桜井村栢山の旧蹟は、久しく桑園菜圃のまゝに委せられ、 旧 蹟の保存は、 是れ独り古橋翁の地下に雀躍すべき所たるのみならず、 此の如くにして一段落を告げたり。 然れども之れに附帯して更に望外の一事をいはゞ、 報徳の発源地に対する遺跡保存の設備、 明治四十二年十一月十五日、 又実に一般諸同 . 人の慶祝して措かざる所な 即ち古橋翁の歿せら 果然として 故古橋 めて完

金銭を得、十一名に

最高額八○銭、

最低額四銭、一人平均一一銭九厘を拠出したという。麦藁や経木を真田紐のように平たく

香川県の特産品であった。

団扇編ヲ為セシニ依リシモノ四名

其他十名」といった方法によって

間食ヲ廃セシニ依リシモノ四十五名

編んだ麦藁真田や経木真田は夏帽子などの材料になるが、

なり。 えて其衝に当らんことを此際広く大方諸彦の賛襄を得て此目的を達せんとす幸に吾等の計画を扶けて、 此の如くにして一は先生の洪徳を後世に伝へ、一は聊か恢復者の篤志に酬いんことを期す。 及び之が恢復の来歴を誌して、永遠不朽に伝へんが為め、誕生の遺蹟地に記念碑一基を建設すること是 斯道の為

応分の醵金を吝まず吾等をして完成を告げしめられんことを懇嘱す。

円八二銭の寄付金が報徳会へ送られたのである。二九四名の生徒はそれぞれ、「倹約ノ結果ニ依ルモノ百名 部北溟との間に、 〇九年 結果ニ依リシモノ六十六名 「三河尊徳」と綽名された人物であった。その七代目古橋源六郎が尊徳生誕地の「恢復」を志しながらも果たし得ず、 「三日を隔て」るという募金広告の記述は正しくない。それはともあれ、七代目古橋源六郎と御木本幸吉ある さて、この募金に応じた者の中に香川県立丸亀高等女学校があった。生徒による三四円七七銭五厘と職員による五 右の募金広告の中に名前の挙がる古橋源六郎とは、愛知県北設楽郡稲橋村 |高慶・斎藤高行と並んで「天下の三篤農」と称された六代目古橋源六郎暉皃の子・七代目源六郎義真のことで、 (明治四二)一一月一三日であり、御木本が尊徳生誕地の整備を完了したのは同年同月一五日であるので、 「三日を隔て」て、御木本がそれを全うしたというのである。ただし、七代目古橋源六郎が没したのは一九 尊徳生誕地整備をめぐって何らかの連絡があったのか否かは、 家事ノ手伝ノ結果ニ依リシモノ三十八名 麦稈及経木真田ヲ編ミシ結果ニ依リシモノ三 (現愛知県豊田市)の豪農で、 今後究明すべき課題である。 は服

よって建立された。 建碑の経緯を記した「二宮翁誕生遺蹟記念碑成る」と題する中央報徳会の報告文を左に抄出した

61

小学児童の之に応じたるものも亦尠からず。仍て本会は建碑工事一切を相州箱根湯本なる福住九蔵氏に委託し、 本会の有志乃ち碑を建て翁の遺蹟を顕彰せむことを謀りしに、各地篤志の士争ふて醵金を寄せ、 女学校生徒及

号の口絵に掲げたるもの即ち是れなり。 :の遺族たる二宮長太郎氏、並に小田原報徳神社宮司草山惇造氏等の協力の下に此程建碑工事全く竣成せり。本 篆額は本会評議員たる内務大臣一木喜徳郎博士 《当時の文部大臣》 の筆

し、深く寄附者諸氏の厚意を感謝す

碑文は同じく本会評議員たる犀東国府種徳氏の撰に係る。

此に建碑の由来と其の竣工及収支決算を報告

碑は尊徳生家に向かって左手に現存する。 吉(十一代目九蔵) 小田原の報徳二宮神社第二代宮司である。 八九二年(明治二五)五月二〇日に没する。また、 の報告文で、中央報徳会から建碑工事一切を委託された福住九蔵とは、 八六円五七銭は丸亀高等女学校ら有志の寄付金、 右の報告文の後に「二宮翁誕生遺蹟建碑会計報告」が掲げられている。すなわち、費用総額二六二円三一銭のうち である。 正兄は、 尊徳を祭神とする報徳二宮神社の創建に奔走するが、 報徳二宮神社や栢山二宮家の関係者が建碑に携わったのであった。 協力者の二宮長太郎は栢山の二宮本家の当主であり、 残りの七五円七四銭は中央報徳会の負担によるものであった。 尊徳の高弟福住正兄 神社の完成を待たず、 (十代目九蔵)の子・政 草山惇三は なお、

する無記名記事として紹介された。左にそれを抄録する。 けてしまう。 御木本によって整備され、 御木本は再び、 生誕地の回復に乗り出すが、そのことは 中央報徳会によって記念碑も建立された尊徳生誕地であったが、 『斯民』に「二宮翁誕生遺蹟と御木本氏」と題 関東大震災で被害を受 鉄は同地付近を通過する予定であるといふ。 車を急がせて小田原城趾なる報徳二宮神社に詣でた後、帰京の途に就いた。因に近く起工さるべき小田原急行電 て発表すること、する。一行は残雪斑々たる函嶺の彼方に落んとする夕陽に照されつ、記念の撮影を終り、 去る三月二十二日午後、 げて之を本会に寄附して永久に保存の道を講ぜられた。ことは十数年前に属するが、 たる御木本幸吉氏大に之を憾みとし、 遺蹟を顕彰する為めに種々考慮しつつある旨を述べられた。是等はいづれ遠からず実現さるべく、其機会に於 |両幹事行を共にした。 相州桜井村栢山なる二宮翁の誕生地跡は久しく桑園菜圃のま、に委せられてゐたが、真珠の養殖を以て知られ 先づ詳しく其実状を踏査した後、御木本氏より、之が修理に要する工費は悉く寄附するのみならず、 周囲の石柵悉く倒壊し、記念碑も亦斜傾する等の被害ありたるを以て、御木本氏は更に其修理を企てられ 忙中の寸閑を以て令息と共に実地の検分に赴かれた。本会よりは留岡理事並に上野、 翁の遺族たる二宮長太郎、二宮兵三郎両氏を首め、同村吏員有志諸氏に迎へられた一行 皆を出して此地を購ひ、且つ樹を植え柵を繞らす等相当の設備をなし、**挙** 同地は一昨秋の大震災の為 更に翁 近

び立つ写真が、下方には御木本を中心に、 衛門の末裔兵三郎らに迎えられた御木本は、修理費用全額の寄付を申し出るとともに、尊徳の遺跡を顕彰するために 種々考慮中である旨を伝えた。この記事は誌面の一頁にちょうど納まるが、頁の左上方には御木本と留岡の二人が並 中央報徳会理事の留岡幸助らとともに被害状況検分のため、生誕地を訪れる。二宮本家の長太郎や、尊徳の弟三郎左 一一名が横一列に並んだ写真が掲載されている。当日撮影された記念写真なのであろう。記事には、 記念碑も傾斜してしまう。そこで、一九二五年(大正一四)三月二二日、御木本は息子(長男隆三、当時三一歳)や すなわち、 一九二三年(大正一二)九月一日の関東大震災によって尊徳生誕地を囲む「石柵」がことごとく倒壊し、 息子の隆三、留岡ら中央報徳会の役員、尊徳の子孫、 栢山村の吏員など計 小田急線の敷設

ものの、 徳生誕地は小田急線の線路からは直線距離で一○○mほど東に位置している。そのすぐ西側には小振りのビルが建つ 工事が近く始まることが記されている。 東京からの客を乗せた電車が尊徳生誕地の間近を通過することになるという情報は、 移転復元された尊徳生家の茅葺屋根の一部分は、 小田急線の新宿~小田原間は一九二七年 現在でも小田急線の車窓から垣間見ることができる。 (昭和二) 四月一日に開通する。 御木本らに尊徳生誕地 近い

栢山報徳社主催の尊徳七十年祭が約一五〇名の来会者を得て、 そうした記事を見出すことはできない。それゆえ、修理の経過は不明だが、翌一九二六年(大正一五) 震災を受けた尊徳生誕地の修理に関しては、実現した折に発表すると、右の引用文中にはあるが、 生誕地にて挙行されたことから鑑みて、 『斯民』 一〇月一七日 それ以前に修 誌上に 再復興を思い立たせる一要因になったとも考えられる。

# 四 御木本幸吉以後の尊徳生誕地・道標

理は完了していたものと思われる。

尊徳生誕地および道標をめぐる動きを追ってみたい。 前述のごとく、御木本幸吉は一九五四年 (昭和二九) 九月二一日に亡くなる。以下では主に、 御木本没後における

両院議長・関係大臣・大日本報徳社関係者ほか) 九五三年 九三四年 (昭和二八) 七月二一日、 (昭和九) 二月二二日、 尊徳記念館建設期成会 尊徳を顕彰することと、 生誕地敷地は中央報徳会から小田原町 (会長は神奈川県知事、 が結成された。一般への募金活動も積極的に展開され、 生誕地を訪れる人々のため 副会長は副知事・ (当時)へ永久無償貸与された。 県教育長・小田原市長、 の総合的施設を建設するこ 顧 九 問 戦後の には衆参 <u>T</u>. 五年

祭が挙行された。 〔昭和三○〕一○月一九日生誕地のすぐ南側に宿泊施設を伴う尊徳記念館が落成、 翌二〇日には同所で尊徳没後百年

は類似例を参考にして復原的に整備されている」という。 家は一八世紀足柄平野の中規模農家の典型であるとして神奈川県重要文化財に指定された。この尊徳生家については、 築当初の材料がほぼ完存していたので、これによって全体の規模や柱の配置が確かめられ、 何回かの移建のためその都度かなりの改造をうけ、特に背面通りは柱まで全部取替えられていた。 尊徳生家 (昭和三五) (三一・三五坪) は小田原市柳新田の渡辺善太郎氏の住宅となっていたが、 九月二〇日、 生誕地に移転復元し、 小田原市へ寄贈した。一九六三年 尊徳記念館建設期成会が一九 (昭和三八) 三月五日 柱間装置など不明の箇 しかし梁組

一家が生誕地に復元された一年後の一九六一年 (昭和三六) 九月三〇日、 中央報徳会は生誕地を小田原市 寄贈

た。

場としての機能を有している。 に替わる新尊徳記念館が竣工し、 された。さらに、 その後、 尊徳没後一一○周年を記念して、一九六五年 尊徳生誕二百年祭が催された翌年の一九八八年 六月一日に開館した。 同館は尊徳についての学習の場として、また広く社会教育 (昭和四〇) 九月、 (昭和六三) 尊徳遺品陳列館が尊徳記念館の 五月二二日、 尊徳記念館・ 遺品 隣に建設 陳 列 館

その地位が変化したのであった。 変更したことで、 開通し、 方、 東海道本線が一九三四年 松田駅構内の道標は、 徐々にその存在を忘れられていった。 前述したように小田急小田原線 (昭和九)一二月一日の丹那トンネル開通に伴って国府津から熱海へまわる路線に 松田駅は東海道線の駅から、 (新宿 |~小田| 原 が一九二七年 同線の支線 (昭 ·御殿場線 和二 四 の駅 月 日

JR御殿場線松田

.駅が所在する神奈川県松田町は二○一二(平成二四)年度、松田駅北口にポケットパーク

尊徳生誕地へ至る散策路の起点としての体裁が整えられたと新聞は報じている。 された金次郎像の除幕式を行なった。これによって、御木本建立の道標が再び多くの人の目に触れられることとなり 備する」としている。その工事は予定通りに進み、二〇一二年 ンフレットの作製などを計画」しており、「IR松田駅から小田原市栢山までの約六㎞のうち、 のりを散策路として整備する」というもので、「散策路は御木本が歩いた『栢山道』を見直し、 上した。これは O m² を作り、 「観光資源としての掘り起こしが狙いで、(中略)併せて尊徳の生家跡がある小田原市栢山までの道 そこに御木本建立の道標を移設し、少年金次郎像を新設するために、当初予算案に七〇〇万円を計 (平成二四) 一〇月二九日に、 松田町内のル 移設された道標と新設 案内看板の設置やパ ートを整

#### おわりに

地 の買入れと整備、 報徳運動の延長線上に位置付くという一面を有するものであるという見方もできよう。 前述のごとく、 その(中央)報徳会の下部組織である三重県斯民会の評議員であった御木本の尊徳生誕地整備も、 日露戦争後、 三重県斯民会の設立とが具体的に如何に結びつくのかは、今後追究すべき課題である。 ならびに松田駅構内の道標建立の一切を完了した。その間の一○月三日に三重県斯民会が発足して 一九〇九年 半官半民の組織である (明治四二) 六月九日、 (中央) 報徳会の設立などによって、 服部北溟の依頼を受けた御木本は一一月一五日には尊徳生 報徳運動は国策との連携を強めてい ただし、 御木本の尊徳生誕 そうした当時

御木本にとって尊徳生誕地整備の目的は那辺にあったのだろうか。例え、

尊徳の業績や教えに感銘を受

かれた足柄上郡主催の地方改良講演会にて講演を行なった。その講演録「再び二宮翁の墓に詣で、」の一部を左に掲 尊徳の没後六○年の祭典が執行された一九一六年(大正五)一○月二二日、二宮家の菩提寺である栢山の善栄寺で開 殖業に励んでいることを、本人の口から聞いた人物で、その翌年の三重県斯民会の発会式にも参列していた。 ための材料となる証言がある。それは井上友一の証言である。 けていたとしても、それだけで、生誕地整備に私財を投ずる全面的な理由とはなるまい。ここに、そのことを考える (明治四一)一〇月下旬、平田東助内務大臣とともに三重県内を巡察した際、 前述したことだが、井上は内務省神社局長として一九 御木本が地域を挙げて真珠の養 井上は

げる。

先生の書斎を保存したことがあって、其の経験に依って、由緒ある名所旧跡の保存と云ふことは、 めたいと思ひ、全国から寄附を募ったのであるが、奈良県の桜井高等女学校を始め、 いからと、私の会へ相談に来られた。そこで私の方では大に喜んだが、尚全国の子女をして、此の美挙を助けし 結構であると悟り、 からの申込があって、今日の如く立派に保存される様になった次第である。 それから今一つ申上げたいのは、 御木本幸吉氏の篤志に依るのである。氏が此の志を起されたのは、曾て氏は伊勢松坂町に在る、 何か他に適当な所もがなと探して居られる際、丁度此の地のことを聞かれて、 先生の御生誕地のことである。 此の遺跡が、見らる、通り立派に保存され 和歌山徳島等の諸県の小学 是非尽力した 世の為に頗る

ためによいことなのかは、これだけでは分からないが、御木本にとっては、本居宣長の書斎を保存した経験の延長線 跡を保存することは、世のためにたいへん良いことであると悟り、他にも適当な場所はないだろうかと探していたと 井上の講演によれば、 尊徳生誕地のことを聞き、(中央)報徳会に相談したというのである。 御木本は「郷土の偉人」ともいえる本居宣長の書斎を保存した経験から、 由緒ある名所旧跡の保存が、 由緒のある名所旧 なぜ世の

上に尊徳生誕地の整備が位置付けられていたようである。

第三節で、

服部北溟が御木本に尊徳生誕地の整備などを依

う。 地の整備と、 なっていた生誕地を整備した際の費用は一切、御木本が支出したことは前述のとおりである。 出来事である。井上の講演録では、尊徳生誕地の整備にあたって「全国から寄附を募った」ように読めるが、 神」と評するくだりがある。御木本にとって、尊徳生誕地の整備は「世の為」「公共の為」なのであった。なお、神」と評するくだりがある。御木本にとって、尊徳生誕地の整備は「世の為」「公共の為」なのであった。 頼したことを述べたが、その経緯を記した服部の文章の中に、 込」があったとあるが、これは、前述したところの、御木本による整備完了後の尊徳生誕地に記念碑を建立する際の 上の講演録には、御木本の「美挙を助け」るために「全国から寄附を募った」ところ、高等女学校や小学校から「申 その地への記念碑建立という二つの出来事を井上、あるいは講演録の筆者が混同してしまったのであろ 御木本について「氏が平素公共の為めに尽される精 御木本による尊徳生誕 桑畑に 井

誕地の整備 振興などの観点から、 は違う形で、さまざまに思いをめぐらせ得る環境に浸ることができる。 ところで、 私たちは尊徳の生誕地を訪れることで、彼の生育過程や人物像、当時の社会状況などについて、文献を読むのと 前近代に活躍した歴史上の人物で、その生家がもとの場所に現在も建つ例は決して多くはないであろう。 道標の建立という事実が基礎となって生まれた現象なのであった。 遺跡 (生誕地・道標) を活用した施策に取り組んでいる。これらは御木本の行動、 また、 地元の自治体も社会教育の充実や地域 すなわち生

#### 注

 $\widehat{1}$ 大林 Ħ 出 九九三年 雄 『御木本幸吉』 吉川弘文館、一九七一年。 御木本真珠発明一〇〇周年史合同編纂委員会『輝きの世紀 同編纂委

- 2 年、三一六~三一七頁 村松敬司「日本近代産業の指導者と報徳」二宮尊徳生誕二百年記念事業会報徳実行委員会編 『尊徳開顕』 有隣堂、一九八七
- 3 関田昇「尊徳誕生地を訪れた御木本幸吉」『史談足柄』 四四集、 足柄史談会、二○○六年、五三~五四頁。
- $\widehat{4}$ 佐々井信太郎「解題」佐々井典比古訳注 『補注報徳記(上)』一円融合会、一九五四年、五頁。
- 5 佐々井典比古「解題」佐々井典比古訳注『訳注二宮翁夜話(上)』一円融合会、一九五八年、一〇頁。
- 6 由井正臣「序論―統治機構の確立と『国民組織』 化」鹿野政直・由井正臣編『近代日本の統治と抵抗 二』日本評論社、

九八二年、三八頁

- 7 酒田正敏「解題」『雑誌「斯民」目次総覧』内政史研究会・日本近代史料研究会、一九七二年、一~四頁。金澤史男「解説」 『「斯民」目次総覧 新版 不二出版、二〇〇一年、三~五頁。山本悠三『近代日本の思想善導と国民統合』校倉書房、二〇
- 8 『斯民』三編一一号、報徳会、一九〇八年、一九頁 一一年、一六・二七頁
- 9 『斯民』 四編一〇号、報徳会、一九〇九年、八六~八七頁
- 10 『斯民』 四編九号、報徳会、一九〇九年、七四頁
- 11 『斯民』 三編五号、報徳会、 一九〇八年、七七頁
- 12 「斯民」 七編七号、中央報徳会、一九一二年、目次・八四~八五頁
- 13 「斯民」 四編一一号、報徳会、一九〇九年、七六~七八頁。
- 14 『斯民』 四編一三号、 報徳会、一九一○年、四二頁
- 15 『大日本報徳学友会報』九一号、大日本報徳学友会、一九〇九年、五〇二頁
- $\widehat{16}$ 国府種徳 『古橋源六郎翁』愛知県北設楽郡農会、一九一二年、九八~一一五頁。
- 五編四号、 報徳会、 一九一〇年、 八〇頁

17

「斯民」

- 18 [斯民] 一〇編八号、 中央報徳会、一九一五年、六九頁。
- 19 『斯民』二〇編五号、中央報徳会、一九二五年、六五頁。
- 20 七頁。 『斯民』 二一編一二号、中央報徳会、一九二六年、六三頁。『大日本報徳』二九四号、 大日本報徳社、一九二六年、二五~二
- 21 小田原市編『小田原市史 通史編 近現代』小田原市、二〇〇一年、六九七頁。
- 22 中野敬次郎 『復刻版 小田原近代百年史』八小堂書店、一九八二年、七○七頁。
- $\widehat{23}$ 小田原市教育委員会編『小田原の文化財』小田原市教育委員会、一九八九年、五八~五九頁。
- 25 『神奈川新聞』二〇一二年二月一六日付。

 $\widehat{24}$ 

神奈川県教育庁指導部文化財保護課編『神奈川県文化財図鑑

建造物篇』神奈川県教育委員会、一九七一年、一五二頁。

- 26 『神奈川新聞』二〇一二年一〇月三〇日付。
- 27 『斯民』一一編七号、中央報徳会、一九一六年、七六頁。
- 28 『斯民』 一一編九号、 中央報徳会、一九一六年、三四頁。

四編一一号、報徳会、一九〇九年、七七頁。

『斯民』

162